様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５９０１２０

研究課題名（和文）社会・精神・身体に相関する音楽的共同性の研究

研究課題名（英文）A Research on Musical Communality Related to Society, Mind and Body

研究代表者
岡崎　宏樹（OKAZAKI, HIROKI）

神戸学院大学・現代社会学部・教授

研究者番号：００３２９９２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、音楽の場に生まれる共同態を分析することを通じ、諸単位の多様性と統一性を両立させる《音楽的共同性》の原理を探求した。まず、社会学、哲学、認知心理学の学説を参照し、リズムの共有と秩序形成の関係を考察した。また、音楽家へのインテンシヴなインタビューを実施し、リズムの創造がどのように言語化されるかを分析した。さらに、大学教育のなかで地域連携型アクティブ・ラーニングを展開し、音楽を通じた共同性の創出に実践的に取り組み、その結果を分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to establish the principles of “musical communality,” which gives a unity to diverse parts of a society, by analyzing the communality arising in the field of music. The principles in question will be pursued in three stages. First, we will compare the main theories in sociology, philosophy and cognitive psychology in order to make clear the relationship between the sharing of rhythm and the formation of a collective order. Second, we will do intensive interviews with eight musicians so that we can investigate the ways in which the acts of rhythm-creation are verbalized. Finally, we will introduce community-based learning into university education, work on actual communality-making through music, and do a critical analysis of the data gathered.

研究分野：社会学

キーワード：社会学　音楽　音楽的共同性　共同体　リズム

１．研究開始当初の背景

従来の社会学的研究において、共同性の概念は、土地・言語・シンボル・価値などの共有を前提とした同質性の秩序として把握される傾向が強かった。一方、公共性の概念は、異質な個人によるルールの共有と理性的コミュニケーションを条件にしたものとして理解されてきた。

これらに対し、本研究は、諸主体が共同の場を構成しつつも互いを差異化する、音楽的行為の秩序をモデルとすることで、同質性と異質性が両立しうる共同性の原理を析出することをめざした。

音楽が自然・精神・社会の秩序に相関するという発想は、古くは古代ギリシア哲学にみられるが、社会思想や社会学における展開は僅かである。例えば、石川三四郎の「社会交響楽」」(1932)や見田宗介の「交響圏」(2006)は、多元的社会のユートピア的秩序を、音楽的概念で比喩的に表象したものといえる。小川博司(2005)は「ノリ」の語の使用に着目し、音楽と社会の関係について先駆的な考察を展開した。いずれも示唆に富む構想であるが、理論的な洗練には至っていない。

本研究の代表者は、博士論文（岡崎 2000）のデュルケーム研究をふまえ、共同性の理論研究を深める一方（岡崎 2011）、家族の音楽療法の経験、音楽家への調査の指導（岡崎 2003-6）、サウンドアートの創作、アートを通じた都市創生の研究など、音楽と社会の関係性を問う研究や活動を実践してきた。これらを通じて、主体どうしの共鳴・共振という現象が共同態の形成に決定的な役割を果たすことがわかってきた。そこで、本研究では、音楽の場をモデルに共同性の理論を再構築することをめざした。

２．研究の目的

本研究の目的は、音楽の場に生成する共同態を分析することを通じ、諸部分の多様性と全体の統一性を両立させる《音楽的共同性》の原理を理論化することにある。

個人化の進展する現代社会において諸単位の多様性と全体の統一性を実現しうる秩序原理を見出すことは、社会学の理論的かつ実践的課題といえる。本研究は、共同的な音楽行為をモデルとする新たなアプローチによって、この課題に取り組む。

音楽がモデルに選ばれたのは、それが異質な諸要素を美的に組織化する動的な均衡秩序であり、社会・精神・身体に相関した共同態を構成する現実的な力を有するからである。

３．研究の方法

研究は３つのアプローチによって進められた。

(1)理論・思想研究

音楽（特にリズム）と社会の関係について論じた社会学、哲学、認知心理学の諸理論を共同性の創出という観点から読解した。

(2)実証研究

共同の場を構成する音楽的行為を音楽家たちがどのように理解しているのかを、インテンシヴなインタビュー調査によって明らかにした。特にリズムの創造に着目して調査をおこなった。

(3)教育分野における実践と分析

大学教育のなかで地域連携型アクティブラーニングを展開し、音楽を通じた共同性の創出に実践的に取り組み、その結果を分析した。

４．研究成果

(1)理論・思想研究の成果は、論文「リズム論的思考⑴――社会学とクラーゲスのリズム論」として発表された。

この論文の目的は、リズムと生命と社会の関係を理論的に考察することにある。

前半部では、デュルケーム、シュッツと西原和久、小川博司をとりあげ、社会学においてリズムという主題がどのように議論されてきたかを検討した。デュルケームの議論の検討からは、リズムが集合力の表現であると同時に生命力の表現であるとの知見を得た。シュッツ＝西原の検討では、リズムの理解が同調の局面に切り詰められている問題、生命のリズムを間主体レベルで把握することの限界などが指摘され、深い音楽体験が「諸単位の相互浸透」をもたらしうることが論じられた。小川博司の「ノリの社会学」の検討では、「ノリ」がリズムの質という主題に関わっており、それゆえ、リズムの体験について理論的に考察しなければ「ノリ」についての知見も深まらないことが指摘された。

問題は生命力の表現としてのリズムをどのように理論化し、社会学的思考につなぐかにある。論文の後半部では、「生の哲学」を代表する思想家クラーゲスのリズム論をとりあげて詳細に検討した。クラーゲスはリズムと拍子を区別し、リズムを「類似物の感応的結合」から説明しているが、彼のいう感応的結合は、集団に閉じられたものではなく、生命世界へ「開かれ」のモメントを含むものである。ここに開かれた共同性の契機をみることができる。

クラーゲス理論の検討からは次のような原理的考察が導かれる。反復的な現象が生起している場合、これを外側から客観的に観察するならば、「拍子の形」がとらえられるが、内側から体験的に把握されたならば、「リズムの形象」がみいだされる。両者を結合するのが〈型〉である。〈型〉は生命秩序と社会秩序を接続する。

〈型〉と〈型〉が感応・共鳴し、持続的な相互調整関係に入ったとき、新たな〈型〉の生成がうまれる。ドゥルーズ＝ガタリの言葉でいえば、それは「リトルネロ」の「アレンジメント」と表現することができるだろう。

⑵「ポピュラー音楽の社会学」（井上俊編『全訂新版 現代文化の社会学』所収）は、ファン研究に着目し、ポピュラー音楽を社会学的に研究する方法を概説した論考であるが、後半部で、音楽における「溶解体験」（作田啓一）が共感的価値を育むことに言及し、音楽は〈トータルな生命－社会現象である〉と論じた。「溶解体験」とは自己の境界が溶けて、自己と外界が相互浸透する体験を意味するが、深い音楽経験は「溶解体験」を導き、「社会的なカテゴリーを超えた連帯意識」をうみだす可能性がある。すなわち、音楽における溶解体験は開かれた共同性の契機となりうるのである。

⑶ 本研究は、社会学理論によって音楽や音楽的行為を分析するのではなく、音楽や音楽的行為に依拠して社会学理論を豊かにすることをめざした。この「音楽からの社会学」を方法論的に洗練するために参考になるのが、作田啓一らが展開した「文学からの社会学」の試みである。作田が文学に依拠することでどのように社会学的思考を展開したのかを研究したが、その成果は「文学からの社会学――作田啓一の理論と方法」「〈リアル〉の探求――作田啓一の生成の思想」に発表された。この検討から明らかになったのは、マイケル・ポランニーのいう「棲み込み」をつうじて、対象を内側から理解することが、社会学的思考の起点になりうるということである。そうすることで、体験的理解から社会学的思考を展開することが可能になる。

この方法論的問題を、デュルケーム理論の再検討を通じて探求したのが、論文「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」である。デュルケームは、対象を外側から「モノ」として客観的に把握するための実証主義的方法を確立した社会学者として知られるが、後期の宗教社会学研究においては集合的沸騰という情動的経験を重視した理論を展開した。その記述を分析すると、「沸騰」（主体の体験）を理解するためには、私たちが「力やエネルギーの圏域」に身を置かなければならないとデュルケームが考えていたことがわかる。生成（沸騰）そのものを思考することはできないが、生成（沸騰）と社会秩序の関係は表象可能であり、また社会学的に探求することができる。この後期デュルケームの思考方法は、体験的理解から出発する「新しい社会学的方法の規準」を示しており、「音楽に依拠した社会学」の展開にとってきわめて重要な示唆を与えている。

⑷ 大学教育のなかで地域連携型アクティブラーニング〈神河プロジェクト〉を展開し、音楽を通じた共同性の創出に実践的に取り組み、その結果を分析した。

〈神河プロジェクト〉は、神戸学院大学現代社会学部の学生と教員３名（岡崎・清原・日髙）が、兵庫県神河町と連携し、地域活性化に取り組むプロジェクト学習である。研究者はこのプロジェクトに音楽家２名を参加させ、地域をテーマとした「たからもの」という楽曲を制作し、地域住民との交流を促進する音楽イベントを開催した。学生たちは現地を取材・撮影し、この楽曲の音楽ビデオやドキュメンタリー映像を制作、これを地域住民の集まりや県議会の場で発表した。プロジェクト学習に音楽を取り入れたねらいは、地域連携の取り組みに〈感性の共振〉のモメントを創出することにあった。〈感性の共振〉は、異なる立場の人どうしが、完成レベルで共振することで、プロジェクトへ動機づけられるモメントをさしている。〈感性の共振〉は学生と地域の〈つながり感〉を促進し、地域の課題を自分の課題と受け止める〈自分ごと感〉、地域貢献に対する〈効力感〉を高めうる。この想定をもとにプロジェクト学習の運営を修正し、プロジェクト終了後に学生のレポートの記述データを分析した。その結果、全体としてアクティブラーニングの深化につながっていること、ただし、深い学びが一部の学生には課題解決に対する動機づけにネガティブに働いていることがわかった。

この教育実践にかんする考察は、清原桂子・日髙謙一との共著論文「地域連携型アクティブラーニングの研究⑴」「地域連携型アクティブラーニングの研究⑵」として発表された。

⑸ 本研究の目的は《音楽的共同性》の原理を理論化することにあったが、研究の過程で、リズム現象に依拠して検討を進めることが有意義であると判断された。そこで、実証的研究では、音楽家たちがリズムをどのように言語的に把握し、他者へ伝達するのかをインタビュー調査で明らかにしようと試みた。演奏の実演を撮影し、映像も参考に検討を深めた。興味深く思われたのは、熟達した音楽家たちがリズムを「楕円」を描くイメージで表象していたことである。楕円の最下部に至ったときに実音が鳴る。音楽家たちは、他者の描く楕円の軌跡をなぞりながらも、それとの完全な同一化をめざすのではなく、互いの距離を調整しながら相補的な関係性をつくりだそうとしており、それが結果として、「生きたリズム」の創造につながっていた。こうした知見は、理論や方法論に関する本研究の成果に反映された。

ただし、演奏者の語りに基づく分析には限界があることもわかってきた。本研究は、音楽に相関する社会と精神の次元について考察を深めることができたが、身体の次元については不十分であった。より客観性の高い研究をめざすためには、認知科学や医学の知見を活用するのが一つの方法であろう。本研究は、最終段階でこの方向に踏み出したが、その成果を形にするには至らなかった。これは今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①岡崎宏樹，2015 年 3 月 31 日，「リズム論的思考(1)――社会学とクラーゲスのリズム論」『Becoming』34，BC 出版，pp.98-132，査読無

②岡崎宏樹，2015 年 11 月 30 日，「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』26，pp.9-90，査読無

③岡崎宏樹・日髙謙一・清原桂子，2016 年 3 月 30 日，「地域連携型アクティブラーニングの研究(1)――《神河プロジェクト 2015》を事例として」『現代社会研究』2，神戸学院大学現代社会学会，pp.98-127，査読無

④日髙謙一・岡崎宏樹・清原桂子，2017 年 3 月 30 日，「地域連携型アクティブラーニングの研究(2)――《神河プロジェクト 2016》を事例として」『現代社会研究』3，神戸学院大学現代社会学会，pp.21-46，査読無

〔学会発表〕（計 1 件）
岡崎宏樹「社会学と哲学――パースペクティブとディシプリンを考えるために」，2014 年 11 月 23 日，日本社会学会シンポジウム「古典と現代――社会学におけるデュルケーム学派の今日的意義」神戸大学滝川記念会館大会議室

〔図書〕（計２件）
①岡崎宏樹，2014，「ポピュラー音楽の社会学」， 井上俊編『全訂新版 現代文化を学ぶ人のために』世界思想社，pp.132-146，263 頁

②岡崎宏樹，「文学からの社会学――作田啓一の理論と方法」，亀山佳明編『記憶とリアルのゆくえ――文学社会学の試み』新曜社，pp.258-310，272 頁

③岡崎宏樹，「〈リアル〉の探求――作田啓一の生成の思想」，奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂，pp.169-196，400 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡崎 宏樹（OKAZAKI HIROKI）
神戸学院大学・現代社会学部・教授
研究者番号：00329921

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）